

ふじのくにパラスポーツ推進コンソーシアム 準備会発足記念シンポジウム

～いつでもどこでも誰もがスポーツを楽しみ、豊かで活力に満ちた“ふじのくに”を目指して～

2023年、静岡県は「東アジア文化都市」として、静岡発の様々なスポーツの魅力を発信しています。その一環として、「パラスポーツのチカラで静岡を元気に!」を合言葉に、障がい者スポーツのさらなる普及、振興に取り組む官民連携組織「ふじのくにパラスポーツ推進コンソーシアム」の設立に向け記念シンポジウムが6月23日に静岡市葵区のしずぎんホールユーフォニアで開かれました。スポーツ庁の室伏広治長官と日本パラリンピック委員会の河合純一委員長による記念トークセッション、パラスポーツ関係者によるパネル討論が行われ、8月下旬のコンソーシアム設立に向けて、パラスポーツの魅力や文化的な価値、コンソーシアムを静岡で始めることの意義などについて意見を交わしました。進行はフリーアナウンサーの鬼頭里枝さん。〈企画・制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

トークセッション パラスポーツと描く新しい未来

静岡県が全国のロールモデルに



スポーツ庁長官
室伏 広治 (むろふし・こうじ)氏
静岡県沼津市出身

河合 東京大会はオリンピックとパラリンピックが一体となり、世界にインパクトを与えた大会だったと思います。組織委員会の橋本聖子会長がオリンピックの閉会式で、「このあとはパラリンピックがあります」とあいさつされました。これはこれまでのオ

鬼頭 東京オリンピック・パラリンピックを通じて広がったスポーツの価値、その後の社会の変化をどう感じていますか。
室伏 東京大会に向けてナショナルトレーニングセンター(東京都北区)が設置されたことで、オリンピック選手だけでなく、パラリンピック選手も一緒に強化されました。その成果がメダルなどの好成績に結びつき、障がいの有無にかかわらず、さまざまな立場の人が一緒に取り組むことができた素晴らしい大会になったと思います。健康者や障がい者が可能な限り一緒にスポーツを行うこと、さらには社会にインパクトを与えられるように取り組んでいくことが大切だと感じました。



静岡県はオリンピックとパラリンピックが開かれた大変重要な県であり、ムーブメントを二過性のものにせず、継続して取り組んでいただきたいです。このコンソーシアムの取り組みは全国のロールモデルになつてほしいし、我々も力強く後押ししていきたいと思えます。

静岡県はオリンピックとパラリンピックが開かれた大変重要な県であり、ムーブメントを二過性のものにせず、継続して取り組んでいただきたいです。このコンソーシアムの取り組みは全国のロールモデルになつてほしいし、我々も力強く後押ししていきたいと思えます。

河合 日本パラスポーツ協会は2030年に向けたパラスポーツの将来像として、「スポーツを通じた活力ある共生社会の実現」を掲げ、2つの柱を打ち出しました。1つ目は競技力向上、そして2つ目は裾野拡大で、多くの人たちにパラスポーツと出合える接点を増やしていくという考えです。そしてこれらの間の木を茂らせ豊かで充実した社会を作る。活力のある共生社会を目指すというビジョンを描き取り組んでいます。

鬼頭 スポーツ庁のスポーツ基本計画や日本パラスポーツ協会の2030年ビジョンではどのような社会、未来を描いているのでしょうか。また地方にはどんな役割を期待しているのでしょうか？



日本パラリンピック委員会委員長
河合 純一 (かわい・じゅんいち)氏
静岡県浜松市出身

～コンソーシアムについて～

2年前に開催された東京2020パラリンピック競技大会では、本県ゆかりの選手が目覚ましい活躍を見せてくれました。シンポジウムの開会あいさつで県障害者スポーツ協会の中西勝則理事長は、「パラリンピックは人々に感動と勇気を与え、障がい者スポーツへの関心が高まりました。そこでさらなる取り組みを検討し、特に障がい者が健康者とともに使用できる施設の早期整備を強く望んでいます。官民が心をつなぐ協力をこのコンソーシアムがその契機となることを願っています」と設立趣旨を説明しました。パラスポーツの推進は共生社会の実現など社会課題の解決にもつながる取り組みであり、パラスポーツを取り巻く多様な課題に持続可能な形で取り組んでいかなければなりません。そのためにもパラスポーツに関わる全てのステークホルダーが結集し、連携して取り組む体制が必要であり、そのプラットフォームとしてコンソーシアムを創設します。

パネルディスカッション ふじのくにパラスポーツ推進コンソーシアムの意義 日本中が注目する取り組み



しずぎんハートフル財団 代表取締役社長
東島 香織 (ひかしま・かおり)氏
静岡県富士宮市出身

河合 環境整備の観点からいうと、障害者スポーツセンターが静岡県にはありません。全国各地で作られて

鬼頭 コンソーシアムでは事業支援、マッチング支援、普及広報活動、ワーキンググループの開催を行っていきます。特にワーキンググループでは、裾野の拡大、アスリート強化、環境整備の3つのグループを設け、それぞれの分野における課題の解決に向け取り組んでいきます。コンソーシアムに対して期待すること、またどのようなことに取り組んでいくべきだと考えていますか。

藤井 障がいがない人もさまざまな障がいを持つ人も一緒に走り、風を切っているような景色を見ることができ、それがパラサイクリングという競技の一番の魅力なんじゃないかと思っています。

東島 スポーツの魅力は選手だけではなく、周りの人と一緒に感動を味わうことができ、楽しむことができるところだと思っています。当社の社員にID柔道の選手がいて、遠征する選手に社員たちが応援メッセージを送っていました。そんなやり取りを見ていると心が温まるような気分になりました。

中山 パラスポーツ選手の能力の高さにとっても感動します。脳科学的にも、健康者が使っていないような体の部位を補いながら動かしているため、普通の人では考えられない脳の働きがみられるといわれています。パラアスリートは無数の可能性を秘めていると感じました。

鬼頭 ここにいる皆さんは何らかの形でパラスポーツに関わっています。普段の活動の中でどんなところに魅力を感じていますか。
河合 オリリンピックが平和の祭典であれば、パラリンピックは人間の可能性の祭典だと考えています。パラリンピックの4つの価値の一つである公平性は、多様性を認め合えば、誰もが同じスタートラインにつくことができる。と定義していて、まさにそれがダイバーシティにつながっていくと考えています。

中山 パラスポーツ選手の能力の高さにとっても感動します。脳科学的にも、健康者が使っていないような体の部位を補いながら動かしているため、普通の人では考えられない脳の働きがみられるといわれています。パラアスリートは無数の可能性を秘めていると感じました。



聖隷浜松病院副院長
中山 理 (なかやま・さとる)氏
鳥取県出身

いるのに、静岡には拠点やハブとなる施設がないことがとても残念です。
中山 私がチームドクターを務めるプレス浜松では、地域の健康診断センターと協力して、メディカルチェックを行い、選手たちのトレーニングや栄養などの健康管理につなげています。パラアスリートにも、そういった医学センターのような施設があればいいと思います。



パラ自転車競技選手
藤井 美穂 (ふじい・みほ)氏
東京2020大会500mタイムトライアル7位入賞 茨城県出身

藤井 例えば葉のことを誰に聞いた方がいいのか、けがをしたときにどうリハビリしたらいいのかなど、専門的なことを聞ける人が日本代表になるまで身近にいませんでした。特に自転車だと道具の調節が1ミミ違っただけで、パワーが全然変わってしまったので、専門家の存在はとっても大きいです。

東島 誰もが楽しめるパラスポーツの普及が必要だと考えます。理解啓発のために、地域のスポーツイベントやフェスティバルにもパラスポーツの部門を設けたり、体験ブースなどで気軽に参加できる機会が増えていくことも必要なんじゃないかと思っています。

河合 静岡のこの取り組みは、日本中が注目していると言っても過言ではないと思います。我々が思いを持って行動し、変化し続ける気持ちで絶対的に重要だと思っています。静岡県がうまくいかなければ、日本でもうまくいくわけがないという気持ちで、この官民連携のコンソーシアムを作り上げていきたいです。



鬼頭 里枝 (きとう・りえ)氏
フリーアナウンサー

～会員募集～

閉会あいさつで出野勉副知事は「パラスポーツを軸に、共生社会の実現、これを目指す本県の独自のパラスポーツ文化を県民の皆さまとともに展開していきたい」と締めくくりました。その第一歩として、ふじのくにパラスポーツ推進コンソーシアム設立準備会事務局では、活動を支える会員を募集しています。個人団体は問わず、参加できる組織となります。コンソーシアムに関する詳細な内容や入会方法は二次元コード=画像=を参照ください。

